

二〇二二年度 一般一月入学試験 前期

国 語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は32ページ、解答用紙はマーク・シート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、マーク・シートに記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、マーク・シートの所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、マーク・シートの左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国

語

(60分) 100点 (解答番号)

1

47

第一問 次の文章は伊集院静の小説「親方と神様」の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

十二月になったばかりの夕暮れ、須崎は六郎の鍛冶場かじにタズ(1)ねてくると、仕事場をぐるりと見回して懐かしそうに言った。

「いや懐かしいですね。私、生まれ育ったのが出雲の佐多町という山の中でしてね。そこに山村の鍛冶屋が一軒あって、職人さんが一人で毎日金槌かなづちを打っていたんです。私、子供の時分、その仕事を見るのが好きで、一日中眺めていました。山で働く人には必要ないろんな道具をこしらえていたんですよ」

「ああ、知っておる。わしの兄弟弟子の一人が山鍛冶職人になったからの。あんたは浩太のタン(2)任の先生ですか。(3)あんたがわしの所に来なされた用件はわかっています」

「いや能島さん、違うんです。私は浩太君に鍛冶屋になる夢を捨てるとは一度も言っていない。鍛冶屋さんはいい仕事だと言いました。鍛冶屋は人間が最初に作った職業のひとつだと教えたんです。浩太君が鍛冶屋になりたいと言い出したのは私のせいでもあるんです……ですから私の話を聞いて貰もらいたいんです。浩太君は能島さんの話なら耳(4)を傾けてくれます。あなたのことを本当に尊敬しているんです」

須崎という教師の話には説得力があった。

その翌日、須崎に連れられて浩太の母が神妙な顔をしてあらわれ、先日(5)の非礼を詫わび、息子を説得して欲しいと頼みにきた。「ともかく話してみましよう」

六郎は二人に約束した。

承諾はしたものの、口下手な六郎の説得をあんな純粋(5)無垢むくな浩太が聞き入れてくれるとは思えなかった。進学した方がおまえ

のためだと話せば話すほど浩太は自分に裏切られたと思うに違いない。

六郎は考えた。妙案なぞ浮かぶはずはなかった。考えた末、六郎が出した答えは彼がかつて少年の時、親方が彼に鍛冶職人がいかに素晴らしい職業かを教えてくれた、あの山径やまみちに二人で出かけ、親方が言ったことと同じ話をしてみようということだった。それは説得(6)とはまったく逆の話なのだが、六郎は自分ができる唯一の方法だと思った。

昼食を終えて二人は岩の上で少し昼寝をした。

六郎は眠れなかった。胸元で浩太の寝息が聞こえた。

六郎の胸の上に浩太のちいさな指がかかっている。いつかこの指が大人の男の指になるのだろうと思った。その時は自分はこの世にいない。浩太がどんな大人になるか見てみたい気がする。(7)六郎は独りで生きてきたことを少し後悔した。

——いや、そのかわりにこの子に逢あえた。

親方の言葉がまた聞こえてきた。

『玉鋼たまがねと同じもんがおまえの身体の中にもある。玉鋼のようにいろんなもんが集まって一人前になるもんじゃ。鍛冶の仕事には何ひとつ無駄なもんはない。とにかく丁寧(8)に仕事をやっていけ』

親方の言葉が耳の底に響いた。

玉鋼は鋼の最上のものである。ちいさな砂鉄をひとつひとつ集めて玉鋼は生まれる。親方はちいさなものを(8)おろそかにせずひとつひとつ集めたものが一番強いということを少年の六郎に言って聞かせた。その時は親方の話の意味がよくわからなかった。それが十年、二十年、三十年と続けて行くうちに理解できるようになった。一日一日も砂鉄のようなものだったのかもしれない……。

浩太が目を覚ました。

「浩太、鋼は何からできるか知つとるや」

「鉄鉱石」

「そうじゃ。他には」

(9) 浩太が首をかしげた。

「ならそれを見せてやろう。靴を脱いで裸足になれ」

六郎は浩太を連れて滝壺の脇の流れがゆるやかな水に膝まで入り、底の砂を両手で掬い上げた。そうして両手を器のようにして砂を洗い出した。浩太は六郎の大きな手の中の砂をのぞきこんでいる。やがて六郎の手の中にきらきらと光る粒が残った。六郎はその光る粒を指先につまんで浩太に見せた。

「これが砂鉄じゃ。この砂鉄を集めて火の中に入れてやると鋼ができる」

「ぼくにも見つけられますか」

「ああできるとも。やってみろ」

浩太はズボンが濡れるのもかまわず水の中から砂を掬い上げると両手の中で洗うようにした。浩太のちいさな手に砂鉄が数粒残った。

「あった、あった。砂鉄があった」

浩太が嬉しそうに声を上げ、六郎を見返した。

「それは真砂鉄と言う一等等な砂鉄じゃ。このあたりにしかない。かなやごさんがこの土地に下さつたもんじゃ。その砂鉄をあつた岩ほど集めて、これだけの玉鋼ができる」

六郎は先コクまで二人が座っていた大岩を指さし、両手で鋼の大きさを教えた。

「あの岩ほど集めて、それだけの鋼しか取れないんですか」

「そうじゃ。そのかわり鋼を鍛えて刀に仕上げればどんなものより強い刀ができる。どんなに強い刀も、この砂鉄の一粒が生ん

どん

「なら砂鉄が一番大事なものですね」

「そうじゃ。砂鉄はひとつひとつはちいさいが集まれば大きな力になる。⁽¹²⁾この砂鉄と同じもんが、浩太の身体の中にある」

「ぼくの身体の中に……」

「どんなに大変そうに見えるもんでも、今はすぐにできんでもひとつひとつ丁寧に集めていけばいつか必ずできるようになる。

わしの親方がそう言うた」

「ぼくも、ぼくの親方のようにいつかなれるんですね」

「……」

六郎は浩太の言葉に口ごもった。⁽¹³⁾

「浩太、わしだけがおまえの親方ではない」

「どうしてですか。ぼくの親方はあなただけです。親方だけです」

⁽¹⁴⁾浩太の顔が半べそをかきそうになっていた。六郎は浩太の頭を撫^なでた。

二人は滝を離れると、青煙の中⁽¹⁵⁾で登った。そこから中国山地の美しい眺望をひとしきり眺めて下山した。

登山口のバス停で二人は並んでバスを待った。六郎はバスのくる方角を見ていた。

「親方、今日はありがとうございます」

浩太がぼつりと言ってお辞儀をした。

「どうしたんじゃ急に、礼なぞ水臭い⁽¹⁶⁾」

六郎はうつむいている浩太を見て、思い出したようにポケットの中を探った。そうしてちいさな石を浩太に差し出した。

「滝のそばで拾うた。みやげに持って行け」

それは鉄鉱石だった。浩太は石をじっと見ていた。

「いつかおまえが大きゆうなったら、この山をもう一度登るとええ。その時は誰か^{だれ}を連れて行って、あの滝を見せてやれ。山も

滝もずっと待ってくれとる。きつとおまえは……」

六郎が言いかける前に浩太が六郎の胸に飛び込んできた。嗚咽おえつが聞こえた。しがみついた手が震えていた。オ、ヤ、カ、タ……。途切れ途切れに声が聞こえた。

¹⁷⁾——この子は今日の山登りを何のためにしたのか、初めっからわかっていたのかもしれない。そう思うと泣きじゃくる浩太の背中せなかのふくらみがいとおしく思えた。

(伊集院静『少年譜』「親方と神様」による)

(注) かなやごさん——かなやごかみ金屋子神。製鉄業・鍛冶職が信仰する神

問 1 傍線番号(1)・(2)・(5)・(11)・(15)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

1

5

(1) タズ_レねる

- ① 海外の事件をホウ道する
- ② 神社に絵馬をホウ納する
- ③ ホウ漫な経営がたたる
- ④ 息子と固いホウ擁を交わす
- ⑤ 外国を歴ホウする

(2) タン_レ任

- ① 残念な結果に落タンする
- ② タン整な顔立ちの人
- ③ 分タンして作業を行う
- ④ 芸術の本質をタン究する
- ⑤ 感タンの声を上げる

(5) 純ス_レイ

- ① 要点を抜ス_レイして示す
- ② 危険な任務をス_レイ行する
- ③ ス_レイ事や洗濯で忙しい
- ④ 平行棒で懸ス_レイをする
- ⑤ 文明がス_レイ亡する

(11) 先コ_ク

- ① 紅葉の溪コ_クをさかのぼる
- ② 罪人のコ_ク印を押される
- ③ 警コ_クを無視して進む
- ④ コ_ク暑の夏を乗り切る
- ⑤ 弱点をコ_ク服する

(15) 中フ_ク

- ① 重フ_クを避けて話をす
- ② 起フ_クに富んだ地形
- ③ 公の金を着フ_クする
- ④ 会議の席でフ_ク案を示す
- ⑤ 病状が回フ_クに向かう

問2

傍線番号(3)「あなたがわしの所に来なされた用件はわかっています」とあるが、六郎は須崎の用件がどのようなことだと思っていると考えられるか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

6

- ① 浩太が鍛冶屋になるのをあきらめさせて欲しいと頼みにきた
- ② 浩太の母の先日の非礼を許してやって欲しいと頼みにきた
- ③ 浩太に鍛冶屋の仕事を教えるのをやめて欲しいと頼みにきた
- ④ 浩太の母に会って直接話を聞いてやって欲しいと頼みにきた
- ⑤ 浩太に鍛冶屋はいい仕事だと話して欲しいと頼みにきた

問3 傍線番号(4)・(8)・(10)・(13)・(16)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ

つ選びマークしなさい。

7

11

(4) 耳を傾けてくれます

7

- ① 心を落ち着けて聞いてくれます
- ② どんな頼みも聞いてくれます
- ③ 注意して聞いてくれます
- ④ 十分努力して聞いてくれます
- ⑤ 真実として聞いてくれます

(8) おろそかにせず

8

- ① 途中であきらめることなく
- ② 他人の力を借りることなく
- ③ 不平不満を言うことなく
- ④ ひとつとして余すことなく
- ⑤ いい加減にすることなく

(10) 見返した

9

- ① 振り向いて見た
- ② 繰り返し見た
- ③ じつと見た
- ④ 頭を上げて見た
- ⑤ 不思議そうに見た

(13)

口ごもった

10

- ① 驚いて次に言うべき言葉を失った
- ② 自分に都合の悪いことは言わなかった
- ③ うまい話で相手を欺こうとした
- ④ 返答に困ってうまく言えなかった
- ⑤ 無視して取り合わなかった

(16)

水臭い

11

- ① もどかしい
- ② よそよそしい
- ③ おこがましい
- ④ そらぞらしい
- ⑤ まどろこしい

問 4 傍線番号(6)「説得とはまったく逆の話」とあるが、これはどういう話だということか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

12

- ① 鍛冶職人にとっては話しづらい内容の話だということ
- ② 鍛冶職人がいかにつらいかを知らせる話だということ
- ③ 鍛冶職人の自分にできるはずのない話だということ
- ④ 鍛冶職人の仕事の素晴らしさを教える話だということ
- ⑤ 鍛冶職人になろうとする夢を打ち砕く話だということ

問 5 傍線番号(7)「六郎は独りで生きてきたことを少し後悔した」とあるが、その理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

13

- ① 浩太とずっといっしょに生きていきたいと思ったから
- ② 浩太が自分の本当の子どものように感じられたから
- ③ 浩太を通して子どもを持ち、育てることの意味を感じたから
- ④ 浩太が鍛冶職人になるのを見てみたかったと思ったから
- ⑤ 浩太が自分の子どもなら鍛冶職人にできると思ったから

問6 傍線番号(9)「浩太が首をかしげた」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の

中から一つ選びマークしなさい。

14

- ① 六郎の質問があいまいなものだったから
- ② 六郎の質問が意味のないものだったから
- ③ 六郎の質問が当たり前のものだったから
- ④ 六郎の質問が的外れなものだったから
- ⑤ 六郎の質問が思いがけないものだったから

問7 傍線番号(12)「この砂鉄と同じもんが、浩太の身体の中にある」とあるが、これはどういうことか。その説明として、最も

適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

15

- ① 一粒の砂鉄が強い刀を生むように、身体のちいさい浩太でもいずれは強い男になる可能性があるということ
- ② 浩太は、ちいさい努力を一日一日と重ねていけば、できなかったこともいつかできるようになるということ
- ③ ちいसानな手で掬い上げても砂鉄が手の中に残るように、子供の浩太でもできることはたくさんあるということ
- ④ 岩ほどの砂鉄を集めても少しの鋼しか取れないように、もともとと勉強する必要が浩太にはあるということ
- ⑤ 真砂砂鉄という最良の砂鉄のような、めったなことでは見つからない特別な才能が浩太にはあるということ

問 8 傍線番号(14)「浩太の顔が半べそをかきそうになっていた」とあるが、この時の浩太の心情の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

16

- ① 六郎のような親方にはなれないと言われ、自分の将来に不安を感じている
- ② 六郎の言葉が予想を超えた内容だったので、驚くとともにとまどっている
- ③ 六郎が自分の将来を思って、進学するよう話していることに感謝している
- ④ 六郎との別れが迫っていることを、会話の中から微妙に感じ取っている
- ⑤ 六郎の言葉を聞いて、本当に尊敬する人に裏切られたように感じている

問9 傍線番号①7「そう思うと泣きじゃくる浩太の背中のみくらみがいとおしく思えた」とあるが、その説明として、最も適切

なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

17

- ① 浩太は尊敬する六郎のような鍛冶職人になることをあきらめられないでいるが、六郎は、浩太は教師や母親の求めに応じて、進学したほうがよいと考えている
- ② 浩太は六郎のような鍛冶職人になりたいと考えているが、六郎は教師や母親の頼みに応じて、浩太を弟子にすることを断念しようとしている
- ③ 浩太が心から尊敬している六郎と、今日で別々の道を行くことになるのを感じ取っていることがわかり、六郎はそのけなげさに打たれていつそう可愛く思っている
- ④ 浩太は鍛冶職人がいい仕事だという教師の言葉をまだ信じているが、六郎は、浩太が教師と母親の反対によって夢を捨てなくてはならないことに同情している
- ⑤ 浩太は六郎に反対されても鍛冶職人の仕事をしたいと思っているが、六郎は、つらい修業が必要な鍛冶職人にはさせたくない、浩太をつきはなそうとしている

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

わたしたちはことばのなかで生きている。わたしとあなたはことばを通してわかりあい、気持ちをかよわせる。しかし不思議なことに、そのときことばそのものは意識の前景から遠ざかっている。ことばはことばの向こうにあるなんらかの事柄を指し示し、わたしたちの(1)をとってそこに導いてくれる。もちろん、その事柄はことばによって、ことばを通してはじめて到達できる事柄であるにはちがいないが、ことばはあくまで媒介なのであって、意識が向かうべき対象にはならない。わたしたちはことばを通してわかりあい、ことばを通して世界を理解する。ことばがわたしたちに寄り添ってくれているかぎり、わたしたちはことばをことさらに意識することはない。このことは、ふだんのコミュニケーションでの経験をふりかえってみるなら、すぐにわかることだろう。ある意味でこれは当たり前「現実」なのである。

ところが、その対極には、まったく異なる「現実」がある。わたしの話すことばが、周囲の多くの人に通じないとき、わたしは否応なくことばを意識せざるをえない。そのとき、いままであれほどなじんでいた風景はよそよそしくなり、ときには(4)をむいて襲いかかってくるように感じられるときさえある。ことばが意識されるたびに、わたしは口ごもり、沈黙(6)してしまうかもしれない。これはわたしという個人だけに生じる出来事ではない。たとえば、家庭や親密な仲間のなかでなんの気がねもなく使えることばが、一歩外に出たとたん通じなくなるとしたらどうだろう。わたしたちは世界で孤立しているのではないか、という思いに襲われるかもしれない。いや、ただ通じないだけならまだいい。わたしたちがふともらしたことばが侮蔑(7)や敵視の対象となったとするなら、二度と自分たちのことばを話したくないと心に決めるかもしれない。ことばを否定されることは、存在を否定されるのとおなじだからである。じつは、「マイノリティ」と呼ばれるひととは、多かれ少なかれ、このような思いを内に秘めて生きている。悲しいことに、これもやはり「現実」なのである。

ことばを通してひとびとや世界と交感するという喜ばしい現実が一方にあり、ことばを通じて差別や抑圧が行われるという残酷な現実が他方にある。このふたつの異質な現実のあいだには、いったいなにが存在するのだろうか。

いうまでもなく、ことばはことばだけで成り立っているのではない。ことばが具体的な社会のなかで用いられるかぎり、政治、経済、文化など、さまざまなレベルの出来事がことばのなかに浸透し、⁽⁸⁾ことばを特定の色に染め上げてしまう。社会はさまざまな軸を基準にしてことばを分類し、それぞれのことばに特定の価値を割りあてる。政治的に支配的な地位にある集団の言語は社会で優勢な言語となり、⁽⁹⁾従属的な集団の話し言葉は少数言語、マイノリティの言語となる。経済的な価値と結びついた言語があるかと思えば、その対極には、⁽¹⁰⁾経済的利ジョンとはまったく無縁の言語もある。重要な文化財として尊重される言語がある一方で、⁽¹¹⁾次世代へのケイ承さえあやぶまれる言語もある。このように、社会活動のそれぞれの領域で、ことばは階層化され、序列化されている。こうした階層化や序列化は (12)。そこにはまさしく「社会的」な言語秩序ができあがっている。

このようにして、言語には、一定の社会的な価値づけがなされる。それは肯定的な場合もあれば、否定的な場合もある。最近の英米の社会言語学の研究にならって、こうした現象を「言語イデオロギー」という用語で呼んでもよいかもしれない。たとえば、国家における公用語をどのように定めるべきか、少数言語をどのように社会的に認知していくのか、何語が学校で教えられべきなのか、等々の問題に取り組むときは、すでに一定の社会的価値を帯びた言語状態を相手にせざるをえない。そこに「言語イデオロギー」が入りこむ⁽¹³⁾地がある。

ある言語が社会的に高い地位に就く一方で、別の言語には低い地位⁽¹⁴⁾があてがわれるのは、「言語イデオロギー」がつくる価値の階層制が自明のものとして受け入れられているからである。言語のあいだに上下関係が存在するという状況に対しては、言語が現実にはたしている社会的機能よりは、社会で流通している「言語イデオロギー」が大きな役割をはたしている場合が多いのではないだろうか。イデオロギー⁽¹⁵⁾というものが一定の観念形態である以上、じつはそのときわたしたちの前に立ちただかっているのは、現実の言語ではなく、「幻影」としての言語なのである。

とはいえ、「イデオロギー」といい「幻影」といっても、たやすく拭^{ぬぐ}い去れるものではない。なぜなら、それらはすでに「現実」の一部に組み込まれてしまっているからである。わたしたちが意味と価値の世界に住んでいるかぎり、完全に無色透明の現実というものは存在しえない。わたしたちがなにかを行おうとするとき、そこにはすでになんらかのイデオロギー的要因が介入

している。そのイデオロギーが社会的に「正しい」ものと見なされているならば、すでにそれがイデオロギーとして意識されることもない。ことばの世界でもおなじである。なぜひとは特定の言語を学ぼうとするのか、どうしてこの言語よりあの言語を選択するのか、こどもにはどの言語を (16) につけさせたいのか、このような選択を前にしたとき、社会のなかで自明のものとしてされた「言語イデオロギー」が、ひとの行動を方向づけるのである。

すでに多くの研究が明らかにしているように、「国語」の理念こそ、近代日本を特徴づける最大の「言語イデオロギー」であるといえる。近代日本において、すこしでもことばのことを考えようとすると、「国語」という理念が出現して意識を方向づけてきたし、それによって特定の価値を成立させるはたらきを行ってきた。このような「国語」の理念は、過去において強力なイデオロギーとしてはたらいだただけでなく、いまでもはたらいだている。「国語」を頂点にすえた階層制のもとで、他の言語は「少数言語」として位置づけられ、あるいは見えなくさせられている。このような言語秩序は一朝一夕に成り立つものではない。現在の「言語イデオロギー」を批判するためには、どうしても過去の時点に立ちかえって、それがどのようにして成立したかを知る必要があるのである。

社会における言語支配の制度は、政治的、経済的な要因だけでなく、イデオロギー的な要因によっても支えられている。そして、そのイデオロギーの内部には、それなりに固有の論理がある。もちろん、その論理は、数多くの思い込みや錯誤、はてはまったくのモウ想から成り立っているかもしれない。けれども、ひとがひとたびイデオロギーの世界の内部に入って、そこに閉じこめると、どんな誤謬論理（注2）であってもそれが「正しい」ものと感じられてしまうのである。だから、イデオロギーを批判するためには、そのイデオロギーが「誤っている」ことを示すだけでなく、どうして「正しい」と見なされるのかを示さなければならぬ。

（イ・ヨンスク『ことば』という幻影』による）

（注1） マイノリティー——少数派

（注2） 誤謬——間違い

問1 空欄番号

(1)

・

(5)

・

(16)

に入る語として、最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ

選びマークしなさい。ただし重複は避けること。

(1)

(5)

(16)

18

19

20

- ① 身 ② 牙 ③ 肘 ④ 頭 ⑤ 手

問2 傍線番号(2)「これは当たり前の『現実』なのである」とはどういうことか。その説明として、最も適切なものを、次の①

～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

21

- ① 言語によるコミュニケーションで誤解が生じてしまうのは、仕方がないことだとして受け入れるということ
② 人間は本来、言語を仲立ちとしてひとびとや世界と交流するが、そのことを日常生活では意識していないということ
③ われわれは非言語的コミュニケーションより、言葉の持つ重要な意義を重視して、ふだん暮らしているということ
④ われわれは生まれながらにして、自らと外界を結ぶ媒体である言語の構築する世界の中で生きているということ
⑤ 言語の適切な運用の方法をたえず意識しなければ、人間は思い通りに言語を操ることはできないということ

問3 傍線番号(3)「まったく異なる『現実』」とあるが、ここで言う「現実」とはどのようなことか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

22

- ① 言語を通じて差別が行われている状況に怒りを感じながら、表立って異議を唱えることができないということ
- ② 自分の使う言語が社会の多数派に受け入れられない場合は、自らの言語使用を積極的に放棄するということ
- ③ 自分の置かれている状況に応じて、仲間内の言語と公的な言語との適切な使い分けが求められるということ
- ④ 自分の使用する言語が周囲の多くの人に通じないときには、言語の存在を強く意識してしまうということ
- ⑤ ふだんのコミュニケーションの中で沈黙を強いられるときには、社会の中で孤立を感じてしまうということ

問4 傍線番号(4)・(6)・(7)・(14)・(17)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

23

27

(4) 否応なく

23

- ① 承知不承知にかかわらず
- ② 希望をまったく抱けずに
- ③ 積極的になれずに
- ④ 好悪の感情は交えずに
- ⑤ 細かな事情を抜きに

(6) 気がねもなく

24

- ① 相手に気を許すことなどなく
- ② 他人の目を意識することなく
- ③ 他人に配慮し気をつかうことなく
- ④ かしこまったところがなく
- ⑤ 周囲に遠慮して強く出ることなく

(7) 侮蔑

25

- ① 相手を見下して笑うこと
- ② 反感をむき出しにすること
- ③ 良くないことを取り締まること
- ④ さまざまな誤解を生むこと
- ⑤ 自分より劣ると見下すこと

(14) あてがわれる

26

- ① 知らぬ間に既に行われている
- ② 不当に低い評価をされる
- ③ 見返りとして用意される
- ④ 求めによらずに割り振られる
- ⑤ 公的に認められる

(17) 一朝一夕に

27

- ① 方針がすぐに変化して
- ② わずかな期間で
- ③ 手間ひまかけて
- ④ 労力をかけないで
- ⑤ あいまいなままで

問5 傍線番号(8)「ことばを特定の色に染め上げてしまう」とはどういうことか。その説明として、最も適切なものを、次の①

⑤の中から一つ選びマークしなさい。

28

- ① 社会の各領域で具体的に用いられる言語を整理して一般化することで、言語を客観的に分析するということ
- ② さまざまな社会的領域と関連する言語の中でも、特定の領域の言語だけが価値を持つようになるということ
- ③ ある人が用いている言語には、その人の日常生活の過ごし方がそのまま反映されているということ
- ④ 社会の中でさまざまな軸を基準に言語が序列化され、特定の意味づけがおこなわれるということ
- ⑤ 言語が階層化されることで、少数派の言語の使用が反社会的なものに見なされるということ

問 6 傍線番号(9)・(10)・(11)・(13)・(18)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

29

33

(9) 従ゾク

29

- ① 体力が持ゾクする
- ② 古い習ゾクが残っている
- ③ 金ゾク製のバット
- ④ 親ゾクが集まる
- ⑤ 海ゾクに襲われる

(10) 利ジュン

30

- ① 血液がジュン環する
- ② ジュン回診療に出かける
- ③ 単ジュンな間違いをおかす
- ④ 湿ジュンな気候である
- ⑤ 矛ジュンに苦しむ

(11) ケイ承

31

- ① 論議をケイ続する
- ② 飛行機の模ケイ
- ③ 消費のケイ向
- ④ 休ケイをとる
- ⑤ 傘をケイ帯する

(13) ヨ地

32

- ① ヨ金を下ろす
- ② 宴会のヨ興を楽しむ
- ③ 奨学金を貸ヨする
- ④ 名ヨを傷つける
- ⑤ ヨ霧がかかる

(18) モウ想

33

- ① 願いがなくなって本モウです
- ② モウ言を吐く
- ③ 消モウが激しい
- ④ 勇モウ果敢に振る舞う
- ⑤ 一モウ打尽にする

問7 空欄番号

(12)

に入る語句として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

34

- ① 気に入らなければ無視すればよいものである
- ② 即座に崩壊するように運命づけられている
- ③ ひとびとにとって悪い結果をもたらすものである
- ④ 社会の成員に実感されることはありえない
- ⑤ 個人の力で簡単に変更することはできない

問 8 傍線番号(15)『イデオロギー』といい『幻影』といっても、たやすく拭い去れるものではない」とあるが、それはなぜか。

その理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

35

- ① イデオロギーや幻影が社会的に正しいものと見なされているなら、人はその社会の中で、それを自明のものとして疑うことはないから
- ② イデオロギーが、いったん社会に根付いてしまうと、ひとびとに魅力的な幻想を抱かせ、非現実的な世界へといざなうことがあるから
- ③ 社会的に弱い立場の人々はある特定のイデオロギーを絶対視すると、それに反するイデオロギーを受け入れることが出来なくなるから
- ④ ある社会に支配的なイデオロギーは、その社会の中で生きる構成員にとって、必然性があつてはじめて共有されたものであるから
- ⑤ あるイデオロギーを絶対的なものとして信奉している社会で、自分だけがそのイデオロギーを否定すると、排除の対象となってしまうから

問9 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

36

- ① いったさいの言語イデオロギーにとらわれずに世界を認識するためには、言語が現実にはたしている社会的な機能に注目すべきである
- ② 言語イデオロギーは、公用語の制定などといった公的な場面には深く介入するが、個人的に言語を選択する場面においては全く意識されない
- ③ 近代の日本では「国語」を理念とする言語の階層秩序が作り上げられ、その他の言語は「国語」よりも下位にあるものとして抑圧された
- ④ それぞれのイデオロギーを支えている論理に誤りが含まれているということは、客観的なイデオロギーなどありえないということを示している
- ⑤ 「国語」というイデオロギーを受容する場合、それがどのように成立したのかという歴史をたどり直すことが望ましい方法である

第三問 次の文章は御伽草子『しぐれ』の一節で、身寄りのない姫君と自邸で暮らしていた左大臣家の中将が、親の勧めで右大臣

家の姫君と結婚することになった場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(20点)

とかくするほどに、その日にもなりにけり。中将殿をしきりに父大臣殿より呼び参らせ給ひけり。中将殿は臥し沈みて、出でもやり給はず。御使ひしきなみに参りけり。姫君仰せけるやうは、「御こころざしだにも変はらぬものならば、契りはさりともしぢすまじ。遅く入らせ給へば、ひとへに大臣殿もわらはがしわざとおぼしめして、いかなる御使ひも候はば、恥づかしく候ふべし。今はとく出でさせ給へ」と涙を押さへてのたまひければ、心ならず出でさせ給ひける。御襖には薰物たきしめて、御直衣着せたてまつりけれども、ただ冥途へ赴く心して晴れもやり給はず。おとひ召して、「我帰らむまでは御側にありて慰めまゐらせよ。暁は帰るべし」とて、侍従にも暇乞ひ、車に召しければ、雑色、牛飼ひ、御隨身、我も我もと色めきて御供に参りければ、中将殿の心には、牛頭馬頭の責めもかくやとうとましくおぼえて、涙せきあへ給はず。

(4) 霞ふり霜さゆる夜に起きわかれ身にたましひもなくぞ行く

かやうにうちながめ、道すがら中有の野辺と思ひつつ、直衣の袖を絞りかねさせ給ひけり。

さるほどに、右大臣殿には玉を磨きたるごとくにこしらへて、待ちたてまつり給ひけり。中将殿入り給へば、小舅の中将、少将出で合ひ給ひて、(5) なのめならずにもてなしかしづき給ひけり。中将殿は、道すがら泣きつる涙に顔面映ゆくて、人々の見たてまつるもさすがにかたはらいたくて、とかく紛らはして几帳ま近く立ち入らせ給ふ。姫君を見たてまつり給へば、何となく空薫物(6)はうちかをり、皆白襲の十二に紅の三重の御袴、唐綾の二衣召してうちそばみ給へる気色、白う清げにあてやかなる有様なり。中将殿おぼしめしけるは、(9) これも彼の人を見ずは事欠けぬさまの人よとは思へども、ふるさとの人に思ひ合はずれば、色白く丈高くしてものしげなる有様なり。御心のとまるべきやう、さらになかりけり。

(『しぐれ』による)

(注1) 襖——裏地をつけた着物

(注2) おとひ——姫君付きの童女の呼び名

(注3) 侍従——姫君付きの女房

(注4) 牛頭馬頭——地獄で死者を責める鬼

(注5) 皆白襲の十二——表着うわぎの下に着る重かさね、桂うわぎ十二枚がすべて白の装

問 1 傍線番号(1)・(3)の解釈として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

37

38

(1) 御こころざしだにも変はらぬものならば、契りはさりととも朽ちすまじ

37

- ① 中将殿の愛情は決して変わらないものなので、私たちの縁は中将殿が右大臣家の姫君と結婚しても消えるはずはない
- ② 中将殿の愛情は決して変わらないものなので、私たちの縁は私が中将殿のもとから去っても消えるはずはない
- ③ 中将殿の愛情さえ変わらないものであるなら、私たちの縁は中将殿が右大臣家の姫君と結婚しても消えるはずはない
- ④ 中将殿の愛情さえ変わらないものであるなら、私たちの縁は私が中将殿のもとから去っても消えるはずはない
- ⑤ 中将殿の愛情までもが変わらないものであるなら、私たちの縁は私が中将殿のもとから去っても消えるはずはない

(3) 車に召しければ

38

- ① 中将殿が牛車にお乗りになったので
- ② 中将殿が牛車をお呼びになったので
- ③ 中将殿が牛車に指図なさったので
- ④ 中将殿が牛車に侍従をお呼びになったので
- ⑤ 中将殿が牛車をご覧になったので

問2 傍線番号(2)「涙を押さへてのたまひければ」とあるが、この時の姫君の心情の説明として、最も適切なものを、次の①～

⑤の中から一つ選びマークしなさい。 39

- ① 不本意な結婚をしなければならぬ中將に同情する気持ち
- ② 中將と父との親子関係にかかわってはいけないと自分に言い聞かせる気持ち
- ③ 右大臣家の姫君との結婚を断らない中將にがっかりする気持ち
- ④ つらいけれど中將を右大臣家に行かせなければならぬと決心する気持ち
- ⑤ どうして中將と結婚してしまったのかと後悔する気持ち

問3 傍線番号(4)の和歌には掛詞かけことばが使われている。掛詞が使われている句として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ

選びマークしなさい。 40

- ① 霰ふり
- ② 霜さゆる夜に
- ③ 起きわかれ
- ④ 身にたましひも
- ⑤ なくなくぞ行く

問 4 傍線番号(5)・(6)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

41

42

(5) なのめならず

41

- ① 予想したように
- ② みな一様に
- ③ 思い通りに
- ④ 名残り惜しく
- ⑤ 並み一通りでなく

(6) かはらいたくて

42

- ① 気の毒で
- ② 我慢できなくて
- ③ 恐れ多くて
- ④ きまりが悪くて
- ⑤ つらくて

問5 傍線番号(7)・(8)の文法的説明として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

43

44

(7) うちそばみ給へる

43

- ① 名詞＋八行四段活用補助動詞の已然形＋完了の助動詞の連体形
- ② マ行四段活用動詞の連用形＋八行四段活用補助動詞の已然形＋存続の助動詞の連体形
- ③ マ行四段活用動詞の連用形＋八行下二段活用補助動詞の未然形＋尊敬の助動詞の終止形
- ④ マ行上二段活用動詞の連用形＋八行四段活用補助動詞の已然形＋存続の助動詞の連体形
- ⑤ 名詞＋マ行上一段活用動詞の連用形＋八行下二段活用補助動詞の未然形＋尊敬の助動詞の終止形

(8) 清げにあてやかなる

44

- ① ナリ活用形容動詞の連用形＋ナリ活用形容動詞の連体形
- ② ナリ活用形容動詞の連用形＋名詞＋断定の助動詞の連体形
- ③ 副詞＋ナリ活用形容動詞の連体形
- ④ 名詞＋格助詞＋名詞＋断定の助動詞の連体形
- ⑤ 名詞＋格助詞＋ナリ活用形容動詞の連体形

問6 傍線番号(9)「これも彼の人を見ずは」とあるが、「これ」、「彼の人」とは、それぞれ誰のことか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

45

- ① 「これ」は右大臣家の姫君、「彼の人」は中将
- ② 「これ」は中将、「彼の人」は自邸で共に暮らしている姫君
- ③ 「これ」は右大臣家の姫君、「彼の人」は自邸で共に暮らしている姫君
- ④ 「これ」は中将、「彼の人」は右大臣家の姫君
- ⑤ 「これ」は中将、「彼の人」は右大臣

問7 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

46

- ① 中将は、最初は右大臣家の姫君との結婚には気が進まなかったが、実際にその人を見ると迷いも消え、乗り気になった
- ② 中将は、右大臣家の姫君が自邸の姫君よりも色白で、より美しく優雅な人であることに気づき、いとしいと思った
- ③ 中将は、右大臣家の姫君を上品な人だとは思ったが、自邸の姫君を恋しく思う気持ちが変わることはなかった
- ④ 中将は、自邸に姫君を残して右大臣家へ行くのが気がかりなのに、侍従も自分の供について来ると知り、悲しくなった
- ⑤ 中将は、右大臣家に行く途中も自邸の姫君のことを思うと悲しくなったが、懸命に涙をこらえて、泣くことはなかった

問 8 『しぐれ』は室町時代に成立した御伽草子であるが、同じ時代に成立した作品を、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

47

- ① 玉勝間
- ② 太平記
- ③ 栄花物語
- ④ 更級日記
- ⑤ 世間胸算用